

7人制ラグビーで挑む

めざすはパリ五輪！

兄弟ラグーマン

盛田 志さん (29歳)
気さん (26歳)

高校生のときから強豪校で楕(だ)円球を追いかけて、今年スタートしたジャパンラグビーリーグワンでも戦ってきた寝屋川市出身の盛田兄



気さん(左)と志さん(北海道山溪合宿で)

ともに3年連続で花園へ地元で活躍する姿見せる
志さんが広島・尾道高校で寮生活をスタートさせたのは平成21年でした。同高は大阪の花園ラグビー場で開かれる全国高校大会にそれまで3度出場。練習が思った以上にきつかった「そうですが、3年連続で花園のピッチに立ちました。」
2年生のときにはFWの要のナンバーエイトでベスト16に。中学校の友人が応援に来てくれた試合に勝てうれしかった」と語ります。

一方、気さんも「親元を離れて生活できるのがポイントでした」と話し、全国大会常連校の山梨・日川高校に進学しました。地元の花園で頑張っている姿を見てもらうことがモチベーションになりました」と言い、志さんと同じように全国大会に3度出場しました。ベスト16入りした3年生の2回戦では4連続トライ。同高の花園通算100試合目を飾る活躍で、翌日のスポーツ紙面に「日川庄勝盛田のチカラ」の見出しが躍りました。

夏合宿で兄弟対決
気さん「大学の思い出し」

志さんは早稲田大学へ。気さんも大東文化大学に進学し、東京と埼玉でラグビーを続けました。

高校時代に2人が対戦する機会はありませんでしたが、気さんが入学した年の長野・菅平の夏合宿で兄弟



▲ワールドラグビーセブンズ・シンガポール大会のアイランド戦でプレーする気さん



▲ピリカモシリセブンズ大会(北海道)でプレーする志さん

対決が実現。気さんが「同じフィールドで80分間を戦い、大学時代で一番の思い出になりました」と言えば、志さんは「弟とはポジションが違い、直接対面するプレーはなかったのです

が、試合後、家族そろって写真を撮りました。3人兄弟で一番下の生(しょう)さんもラグビーに打ち込み、改めてスポーツ一家の絆を感じたといいます。

「まるで義務教育みたいに小さい頃からラグビーボールで遊んでいました」と口をそろえる盛田兄弟。お互いに刺激を受けながらラグビーの道をまい進してきましたが、志さんは大学を卒業すると、初めて父親や弟と違う道を選びました。

商社マンからの挑戦
志さん「弟の姿に刺激され」

「ラグビーを続けたい気持ちはありました」と志さん。しかし社会人チームから声がかからず、大手商社に就職しました。それでもラグビーへの思いを断ち切れず、福岡に拠点を置く社会人トップリーグの宗像サニックスブルースに入った気さんと天理大学でプレーを始めた志さんに触発されました。

気さんは「1年生から試合に出ていましたが、3年生のときにニュージールランドに留学し、社会人チームのスカウトの目に止まる機会が少なくなりました。自分のプレーを収めたDVDを作って手当たり次第に売り込みました。」

そんな弟のラグビーに対する一途な姿を目の当たりにし、「社会人に挑戦する姿勢の甘さや覚悟の弱さを痛感しました」と振り返り、2年後に商社を退職。ニュージールランドのチー

7人制ラグビーとは

1チーム7人の選手でプレーし、セブンズとも呼ばれます。15人制ラグビーと同じグラウンドを使うため、ボールの動きが多く、スピーディーな試合展開が見どころ。試合時間も7分ハーフの計14分と短く、1日に行われる試合数が多いのも特徴です。2016年のリオデジャネイロ五輪から正式競技に採用されました。

私とふるさと

志さん「一番の思い出は讚良東町にあった市民プールです。大東市の社宅にいた頃からよく父親の運動不足解消に付き合わされて炎天下を歩いて通っていました。プールに行くと、家では禁止されていた炭酸飲料を飲めたので、とても楽しみでした」

気さん「5年生のときに市立第五小学校に転校。第六中学校では野球部に入っていました。友だちとよく大型量販店やゲームセンターに行って遊び、少ないお小遣いでたこ焼きなどを買って食べていました。両親には内緒でしたが」

「リードをもっと上げたい。」
7人制の新たな世界に飛び込んだ2人の目標は、パリ五輪の日本代表メンバーに選ばれること。「以前にも増して切磋琢磨し、高いレベルで長くプレーしたい」とさらなる高みをめざします。